

# あなたがダーウィンにこだわるなら、私もその重大さゆえに それにこだわる

Greatchain

2019/05/19

我々人類は今、地球規模で、挑戦を受けている。挑戦してくる相手は、密かな策略とプロパガンダを用いる、天性のプロである。もし挑戦されている者が、その事実を知らないでいるとしたら、彼らにとってこれほど有り難い、御しやすい相手はいない。我々日本人は、残念ながら、その有難い者たちに、限りなく近い存在であることを認識すべきである。

これは必ずしも、我々の頭が悪いとか、無思慮だとかいうことではない。日本人が世界から愛され信頼される民族であることは、誰もが認めている。また我々は人を疑わない。これは確かに美德である。しかしそれは、人をよく調べ知った上でのことで、その努力もしないで人を信頼するなら、それは場合によっては、悪徳に一変することもある。我々は悪辣極まる人間の集団から、それとは全く知らされずに、途方もなく恐ろしい挑戦を受けている。

何を挑戦されているか？ それは「そもそもあなたは何者か」という問題についてである。我々日本人は、正面からこういう質問を発することがあまりない。その質問自体が、西洋から来たものと思われる。これは、誰が人間を創造したのか、人間はどこから来て、どこへ行くのか、というよく耳にする問題に帰着するが、これを真剣に考える日本人が大勢いる（いた）とは考えられない。日本の宗教は、そういう形而上学的な問いを誘発する構造になっていない。その自信がないからこそ、廃仏毀釈などということが起こったのだろう。我々の間にも「造化（の神様）」という言葉は昔からあったが、考える真剣な対象となったことはない。その証拠として顕著な事件は、ダーウィン進化論が我が国に紹介されたとき、ほとんど何の抵抗もなく、我々に受け入れられたことである。

ダーウィン自身は、偶然の変化に作用する自然選択という、この単純な理論を発表したとき、決して堂々としていたわけではない。それはまず、神が不要になることを意味するものだった。それだけでなく、化石の証拠について自信があったわけでもなく、頭で考えても納得できないことが、多々あったからである。そこで彼の家族の気にしていた、人間の起源に言及することを、彼は『種の起源』では避けた。そして『人間の由来』で、やっとこれを曖昧な

態度で取り上げた。また彼は自説を発表するとき、同じようなことを言い出したアルフレッド・ウォーレスに、先を越されないように、出版を急いだと言われる。しかし、今でもほとんど人が知らないでいるが、ウォーレスは晩年には、ダーウィンとは正反対の立場を取り、生物進化を目的論によって説明するようになった。これは教科書にはひた隠しされている。けしからん話だが、それくらいダーウィン説が脆弱だという話でもある。

ダーウィン進化論が、20世紀にかけて絶大の影響をもつようになったのは、科学的に正しいからではなかった。科学とは関係のない別の動機によるものだった。そしてその怪しい動機が、特にわが国では、いまだに無視されていることに注目すべきである。そしてここには、わが国の特殊事情があることに注目すべきである。先に言ったように、わが国では宗教は、ユダヤ・キリスト教の西洋とは、別の働きをしている。西洋では、宗教は人間のアイデンティティに関わり、創造者と自分の関係を問うものだが、わが国では、その意識は薄いと思われる。これはつまり、科学と宗教の分離が、わが国ではより徹底しているということである。

また、明らかに無神論的動機を持つダーウィン進化論が、日本では、そんな動機が疑われることはなく、純粋な科学として取り入れられた。西洋では、普通、無神論者といえば「まともでない人間」という意味だが、日本ではむしろ逆で、半世紀ほど前の話だが、日本のある留学生が欧米で、「あなたの宗教は何ですか」と訊かれたとき、憤然として「私は無神論者です」と答えたという話がある。「馬鹿にしないでくれ」という意味であろう（問われたのは明らかに宗教圏である）。呆れるような話だが、この精神は大学などで、今もわが国に健在である。

では、それほど信用されなかったダーウィン進化論が、根拠もなしにこれほどの地位を築き、絶対的真理のように扱われたのは、なぜか？ それはその**利用価値**のためである。利用価値とは、その科学的な信頼性などどうでもいいということだ。それがどのように政治的利用価値をもったかについて、詳しく話せばきりが無い。そもそも、ダーウィンの宣伝屋として有名な、そして（教科書に長年使われた）ニセの胚の絵で有名なエルンスト・ヘッケルは、ヒトラーにつながる帝国主義者だった。もしこの進化理論が科学的真実であるなら、世界の帝国主義にとって、これほど重宝な理論はなかった。そこで「最適者の生き残り」が喧伝され、「優生学」（去勢、不妊手術）の実践が、特にアメリカで堂々で行われた。（歴史は繰り返す――これは現在の米民主党の極端なプロチョイス＝中絶運動に似ている）。

そしてこの帝国主義は、ナチスドイツを経由して、現在、帝国主義の本元であるイルミナティ陰謀団（ルシファー教団）に還っている。言い換えると、ダーウィン進化論は、あたかも純粋な生物学の問題であるようなふりをして、世界を征服する正当な根拠として用いられ

たのである。これがこの理論のカラクリである。だから、これを利用する者たちにとって、ダーウィン進化論の策謀が見破られることは死活問題だった。彼らは、この世界はモノと物力だけでできていて、高次元の見えない世界など存在しないという、唯物論な宇宙観を死守しなければならなかった。ただ、これは戦略として重要なだけで、彼ら自身は唯物論者でも無神論者でもなく、神の存在もサタンの存在もよく知っている。生半可な宗教家よりもよく知っている。ここが肝心である。

NHKの「ダーウィンが来た」という、ダーウィンの出てこない不思議な番組は、そういうものとして考えると腑に落ちるだろう。これはもちろん、生物学としてのダーウィンだと彼らは言うだろう。しかし生物学としても、この説はほぼ完全に破綻している。一つの生物種が他の種に、ダーウィンの方法で、徐々に変化（進化）することはないことが、わかっている。どうしてもそれが言いたいなら、真剣に（宣伝や戦略でなく）進化を考えている学者に聞いてみればよい。ダーウィンが正しかったなどと言う人は、おそらく一人もいないはずである。私がこんなことにこだわるのは、単に生物学的関心からではない。それはあらゆる学問だけでなく、人間の思考そのものを硬直させ、墮落させてしまうことを憂慮するからである。そしてそれが彼らの狙いである。

そして、ダーウィンを通じて生じた、この宇宙解釈の選択の問題が、現在の、トランプ政権によって顕在化された、世界的な政治的な争いの根底にある。人間は神に通ずるものか、それとも下等動物と本質的に同じものか？ この闘争の本質は、善悪闘争、神とサタンの闘争である。ルシファー教団にとって、ルシファーを敵として戦う教団や、ダーウィン進化論の間違いを証明するインテリジェント・デザイン理論などは、生かしておけない敵であるから、彼らは、お手の物であるメディアを使って叩き潰そうとする。

我々の住む宇宙の本質は、モノや物力からなる構造物でなく、より深い見えない次元の、生命、意識、意志、計画の、多様なレベルで絡み合う有機的統一（生命体）である。これをあえてバラバラにする唯物還元論は、自覚せずしてサタンに与するものである。

宿題として——宇宙解釈の仮説は、下のどちらがより有効であるか、もしどちらも不合理だというなら、どのように前提をあらためるべきかを、考えてみていただきたい：——

Seeing precedes the eye 見る（見る意志、計画、目的）が眼という器官に先行する  
The eye precedes seeing 眼が見ることに先行する（ダーウィン進化論）  
(precede: 時間的・構造的両義の先行)

——以上

